

## 明代における『仏祖統紀』の流伝と出版

會 谷 佳 光

### はじめに

『仏祖統紀』（以下略「統紀」）は、南宋末期に天台宗の釈志磐が編纂した仏教史書である。本書の出版は、多くの勸縁者の協力を得て、執筆中の咸淳元年から四明東湖の地で開始され、まず咸淳七年に四十卷本が完成・流通した後、宋末には編年体の中国仏教史である法運通塞志十五卷を加えた五十五卷本が刊行されたようである。<sup>①</sup>元代の出版は未確認であるが、明代には官版大藏経である洪武南藏本・永樂南藏本、民間で出版された大藏経である嘉興版大藏経（以下略「嘉興藏」）本の三種の版本が開版された。この三種の明版はみな宋版五十五卷本を祖本とする同系統の版本であるが、宋版四十卷本や日本の慶長元和間古活字印本（以下略「古活字本」<sup>②</sup>）と比べ、本文・内容構成に異同が多い。このテキスト間の異同に関しては、佐藤成順氏、最近では西脇常記氏に詳細な論考があり、その主たる発生原因が明らかにされている。<sup>③</sup>ただし佐藤氏は論文執筆当時洪武南藏本を見ておらず、西脇氏も、天下の孤本である洪武南藏本はまだしも、日本で実物を見ることが可能な永樂南藏本・嘉興藏本でさえ景印本しか見ていない。また両氏の論考はテキストの異同の原因を探ることに重点が置かれているため、書誌学的に見ると、看過されている重大な問題がたくさんある。また版本以外にも目を広げれば、一大類書『永

樂大典』中に法運通塞志の一部が収録されているし、嘉興蔵の開版とともに長足の進歩を遂げた仏典解題目録にも『統紀』は著録されている。そこで本稿では、明代における『統紀』の流伝と出版に対して、『大典』等の新資料を加えて、版本学・目録学の見地から考察してみたい。

なお本稿末に『仏祖統紀』版本系統図<sup>(4)</sup>を付したので、随時参照されたい。引用文中の「へ」は原文の小字注である。

# 一、洪武南蔵本

それまで単行していた經典が大蔵經に収録されることを入蔵と呼び、官版の場合、皇帝の認可を必要とする。一旦入蔵された經典は、ほとんど散佚することなく現在に伝わるのに対し、入蔵されなかった經典は途中で散佚するか、罕見の書物となっていることがまある。その点、『統紀』は洪武南蔵に入蔵されたことで、現在に伝わるための一つの確実なルートを得た。

洪武南蔵は、わずか一セットを伝えるだけの罕見の大蔵經であり、一九三八年に四川省崇慶県光嚴禪院（上古寺）で発見された後、四川省圖書館に歸し、一九九九年二月から二〇〇二年にかけて四川省仏教協會から景印刊行された<sup>(5)</sup>。その正蔵五百九十一函は、洪武五年に洪武帝の勅を奉じて磧砂蔵（南宋至元刊）を底本として開版され、建文三年冬に完成した。統蔵八十七函は、この正蔵の完成を受けて勅命が下り、諸宗の重要典籍を續刻したものである<sup>(6)</sup>。『統紀』はこのうち統蔵に収録された新入蔵經典であり、景印本『洪武南蔵』第二三七至二三九冊の三冊に収録される<sup>(7)</sup>。この景印本によって、その書誌を記すと次のようである<sup>(8)</sup>。

仏祖統紀五十五卷 欠卷第三十二第三十三 宋釈志磐撰 四十三帖

上下单辺左右無辺匡郭寸法不明 無界一面六行十七字小字双行注 無魚尾白口 無点 有図

首咸淳五年釈志磐「仏祖統紀序 賞一」 次校正僧五名連記 次「仏祖統紀通例」 次咸淳中釈志磐「仏祖統紀目錄」

次「仏祖統紀卷第一 賞二／宋景定四明東湖沙門志磐撰」 以下至卷第五十五 卷頭編著事項卷第二十七第三十五

至第三十八第四十至第五十一「景定」作「咸淳」 卷第五十二至第五十五「景定」作「咸淳」又「東湖」作「福泉」

無版心題 版心中部有千字文及其帖数、版心下部有紙数 題簽題「仏祖統紀」又有千字文

千字文は「賞」・「黜」・「陟」・「孟」四字が割り振られており、「賞」字が全十二帖（一至十二）、「黜」字が全十一帖（一至十一）、「陟」字が最初の二帖二卷（卷第三十二第三十三）を欠き八帖（三至十一）、「孟」字が全十一帖（一至十一）を占める。

洪武南藏本で最も注目すべき点は、その底本に欠けていた卷第二十一「諸師列伝十一」に、南屏下第九世四十三人・第十世三十五人、広智下第十世十人、南屏下第十一世（原文「第十世」に誤る）二十四人の師承・道号・僧諱を補った点である。<sup>⑪</sup> その巻頭第二行に「皇明僧録司左善世天禧講寺住持溥洽統編」とあるのによれば、これは明の僧録司左善世（正六品）・天禧講寺住持であつた釈溥洽によつて統編されたものである。

溥洽は、明・楊士奇「南洲治法師誌略」・『明史』卷第四百十五姚広孝列伝によれば、字南洲、会稽の人、郡の普済寺で具足戒を受けた。その後、洪武帝によつて僧録司右講經に任ぜられ、天禧講寺西丈室に住すること三年、同寺の住持を兼ね、さらに三年して右闡教、ついには左善世に昇任した。しかし永楽帝が即位すると、靖難の変のとき、溥洽が建文帝の剃髪を行つたことが問題となり、さらに当時行方わからなかつた建文帝を匿つてゐるとの噂がたつたため、ついに囚禁されることになった。それから十年余りたつた永楽十六年、永楽帝の燕王時代からのブレンであつた姚広孝の遺言で溥洽はようやく釈放され、のち右善世に任ぜられ、宣徳元年に示寂した。つまり溥洽が左善世かつ天禧講寺住持であつたのは、永楽帝に囚禁される前のことであり、『統紀』を収録する統蔵の開版が建文三年冬に始まることから、卷第二十一は建文四年頃統編され、時を経ずして『統紀』が開版されたと見られる。

次に、洪武南蔵本の底本について考えてみたい。注目すべきは洪武南蔵本と同じ五十五巻本である日本の古活字本である。両本とも志磐自序に「凡之為五十四巻。」とあるにもかかわらず、目録・本文は五十五巻となつてゐる。同じ五十五巻本といつても、巻第二十一が、洪武南蔵本では溥洽の続編であり、古活字本では原欠である点で異なるが、洪武南蔵本は底本がもともと欠いていたから続編したのであつて、古活字本同様、原欠であつたことは明白である。以上の点から、両本共通の祖本として、巻第二十一を欠く状態で流通していた五十五巻本の存在が浮かんできく。両本の自序に「五十四巻」と記すのはその証拠と考えてよい。この五十五巻本は現在伝わらないが、古活字本が「宋」を「天宋」に作る点等から考えて、宋版であつたと見られる。野沢佳美氏によれば、洪武南蔵の続蔵所収經典には、江南地方で流通していたテキストを底本にして、独自の編纂を加えたものが多いとのことであるが、『統紀』の初版本である宋版四十巻本は四明の地で開版されたものであり、宋版五十五巻はこれに法運通塞志十五巻を補刻したか、全体を新たに重刊したかしたものかと推測されることから、やはり江南地方で流通していたテキストと見てよい。

洪武南蔵本と古活字本は、ともに宋版五十五巻本を底本とするものの、巻第二十一の続編の有無以外にも異同が多い。本文の異同については後述するとして、体裁面について例を挙げると、洪武南蔵本が巻第三を上下二巻に分けるのに対し、宋版四十巻本・古活字本とも上下に分巻していない。これは、洪武南蔵本の編輯者が他の巻に比べて分量の多かった巻第三を二帖に分けることで、各帖の紙数・厚さを平均化しようとしたことによるものであろう。また宋版四十巻本・古活字本では正史に倣い、各巻巻頭の第一行に篇名、各篇の巻次、書名（仏祖統紀）、全体の巻次の順に記すのに対し、洪武南蔵本では第一行に書名、全体の巻次の順に記し、第三行に篇名、篇次（一至十九）、各篇の巻次の順に記すという一般的な漢籍の形式に変更した。これは、洪武南蔵への入蔵に当たり、他の經典と書式を整える必要があつたためであらう。

## 二、永樂南藏本

溥洽の住寺である天禧講寺は、南京城南端の聚宝門外にあった明代の三大刹の一つで、溥洽の属した僧録司も洪武二十一年に同寺に移置された。天禧講寺には洪武南藏の版木が保管されていたが、永樂六年頃、放火によって灰燼に帰したため、永樂帝が命じて、版木の失われた洪武南藏を再編・重刊させたものが、永樂南藏であると、これまでいわれてきた。<sup>15</sup>これに対し、野沢氏は天禧講寺の火災で焼け残った版木が相当あったのではないかと考え、いくつかの仏典に対して、洪武南藏の版木が補修されて永樂南藏に使われたことを論証している。<sup>16</sup>ただ野沢氏は『統紀』に関しては、洪武南藏の版木が残っていたのか、焼失したため新たに開版されたのか考察していない。そこで、この点について永樂南藏本に即して確認してみたい。

永樂南藏本は、日本では完本でこそないものの、立正大学図書館・山口県快友寺に所蔵される。<sup>17</sup>このうち立正大学図書館所蔵本（以下称「立正本」）を調査したところ、全五十四巻中、半分強の二十八巻を欠き、十九帖を存するのみであった。巻第十二第五十四の巻末には、万曆十八年に山西潞安府長治県太平郷明道都一里角原村の趙継先の一族が喜捨して大藏經全六百三十八函を法住寺に納めたことを記した納經記が刷られ、<sup>18</sup>巻第十二巻末の韋駄天像の右下方には「南京聚宝門裡■坊巷口經房徐後山印行」（木記）、巻第五十四巻末の蓮牌が刷られた頁の左下方には「南京聚（宝門裡）皇殿廊經房徐後山印」（無枠）と記された經鋪の印造記が刷られているから、万曆十八年頃に南京聚宝門内の經鋪、徐後山によって印造されたことがわかる。表紙は改装されているが、原表紙が題簽ごと貼り付けられているものもあり、それらによれば題簽は黄絹に「仏祖統紀卷第九 城」（書名・巻次・千字文）といった書式で刷られている。千字文は「城」・「昆」・「池」・「碣」四字であり、洪武南藏本と異なる。

この立正本は五十四巻中二十八巻を欠くだけでなく、巻首や巻末に欠丁のある巻が多い。これに対し、永樂南藏本の完本が『中華大藏經』第八十二冊（以下略「中華本」）・『統修四庫全書』第二二八七冊子部宗教類（以下略「統修本」）に景印さ

れている。前者の所蔵機関は不明だが、後者は北京大学図書館蔵の明刊本<sup>(21)</sup>である。後者によつて永樂南藏本の書誌を記すと、次のようである。

仏祖統紀五十四卷 宋釈志磐撰 四十五帖<sup>(22)</sup>

上下单边左右無辺縦二十四・〇横五十五・八<sup>(23)</sup> 無界一紙五折 一面六行十七字小字双行注 無魚尾白口 無点 有図

首扉絵(釈迦と六十四菩薩像) 扉絵左下方に「南京聚宝門外雨花〔台〕／□□孟〔洪〕字経房印行」の木記あり

次蓮牌云「皇帝万歳万々歳」 次咸淳五年釈志磐「仏祖統紀序 城一」 次校正僧五名連記 次「仏祖統紀通例」

次咸淳中釈志磐「仏祖統紀目錄」 次「仏祖統紀卷第一 城二／宋景定四明東湖沙門志磐撰」 以下至卷第五十四

卷第四十一末蓮牌欄外下方に「南京聚宝門外雨花／台経房孟洪字経房印行」とあり 巻頭編著事項卷第二十六第三十

四至第三十七第三十九至第五十「景定」作「咸淳」 巻第五十一至第五十四「景定」作「咸淳」又「東湖」作「福泉」

次韋駄天像 無版心題 版心中部有千字文及其帖数、版心下部有紙数 印記「北京／大学／臧書」「徐乙昌／拜経

記」

扉絵や巻第四十一末蓮牌欄外下方に刻される印行者が立正本と異なるのは、印造年代や印造を請け負った経鋪が異なるからである。三本の刷りの前後については、版面の状態から見て、立正本が最も早印と見られるが、なかでも注目すべきは巻第五十一の第一紙である。続修本・中華本の第一紙は第二紙以降と版面、特にその字様が異なる。これに対し、立正本は両本と違い、その字様は第二紙以降と同じであるものの、版面の痛みは最も激しい。おそらく立正本が印造された万暦十八年頃は、第一紙はまだ痛みの激しい古い版が使われていたが、その後、さらに痛みが進み、新版が開版されるに至ったのであろう。なお中華本には景印の際に補正処理を加えた痕跡が多々認められることから、続修本との刷りの前後は確定しがたいものがある。

### 三、両南蔵本の関係

次に、永樂南蔵本は焼失を免れた洪武南蔵本の版本を使って印造されたものか否かを考察してみたい。まず構成面から見ると、その総巻数は、巻首の目録が五十五巻の構成を伝えるのに対し、本文は五十四巻で一卷足りない。これは、目録上は洪武南蔵本と同じく巻第二十一に「諸師列伝六之十一」があるのに対し、本文にはこれがなく、洪武南蔵本の巻第二十二にある「諸師雜伝七」が巻第二十一になっていて、以下、洪武南蔵本に比べて一卷ずつ繰り上げられているためである。それではなぜ永樂南蔵本には「諸師列伝六之十一」がないのであろうか。

そもそも洪武南蔵では、その続蔵の出版にかかわった釈浄戒等の手によって歴來の經典に対してしばしば再編が加えられた。これら再編經典に対して、永樂帝はその入蔵を取り消したり、改刻・改修を行つて<sup>(24)</sup>いる。このうち入蔵の取り消しに関する記録には次のようなものがある。『金陵梵刹志』巻第二・欽録集・永樂十八年十二月十八日条に、

行在僧録司左覺義慧進等謹題、為謄写蔵經事、除謄見行打点查對外、今查得聯珠頌古等、皆係南京蔵内増入、請旨合無除去、惟復刊入為此。今將各件名目巻数開後、謹具題知、計四件共一百四十二巻、今將作一百六十九巻  
禪宗

聯珠頌古二十一巻 宋淳熙年間、僧法心原編。又延佑年間、僧普会統編。今浄戒重校刊入。

古尊宿語 宋咸淳年間、僧頤蔵主原編。今浄戒除去原編僧名、重校刊入。

続伝灯録三十六巻 不見原編集僧名、伝説是居頂將古人所編刊入。

講宗

仏祖統紀四十五巻 宋景定間僧志磐撰。今管蔵経僧宝成募縁刊入。十九日、伝奉欽依、不入蔵、欽此。

とある。この上奏文は、僧録司左覺義の職にあつた慧進等が、洪武南蔵の続蔵部分に新たに入蔵された經典に対して、入蔵

の可否の判断を永楽帝に仰いだものであり、上奏の翌日、永楽帝はこの四部の仏典を入蔵させないとの決を下している。これらの經典はいずれも永楽北蔵に入蔵されていないから、永楽北蔵開版の際の上奏文と見てよい。<sup>(25)</sup> 永楽帝直々に永楽北蔵への入蔵を取り消したのであれば、永楽南蔵のみ何一つ手を加えられることなく入蔵を許されたとは到底考えられない。つまり「諸師列伝六之十一」の削除こそが入蔵から除外されずに済んだ代償であり、それには次のような背景があったと考えられる。

『統紀』の底本に欠く巻第二十一「諸師列伝六之十一」を統編した人物、つまり溥治は洪武・建文両帝の寵愛を受け順調に出世したが、先述のように、永楽帝の時代になると、建文帝を匿っているとの嫌疑をかけられて囚禁された。永楽十八年に『統紀』を北蔵から除外するとの決が出た当時、溥治は姚広孝の遺言ですでに釈放されてはいたものの、このような背景があつたことから、慧進等は他の問題のある禅籍とともに永楽帝の裁可を仰いだものと思われる。その結果、入蔵を認めなかつたのであるから、永楽帝は釈放こそしたものの、溥治の嫌疑が晴れたとは考えておらず、心中快からず思っていたのであろう。永楽南蔵本から溥治統編の巻第二十一を削除したのはその現れと見て取ることができる。<sup>(26)</sup>

さて、永楽南蔵本が洪武南蔵本の版木を使つて刷られたものであれば、巻第二十一「諸師列伝六之十一」の削除に伴つて巻次を変更した痕跡が、巻第二十一以降の各巻巻頭・末題に埋木として確認できるはずである。調べてみると、確かに巻第二十一以降の巻次には一部埋木らしき痕跡が認められ、なかには実際の巻数よりも一巻多い巻があるなど、もともと五十五巻本として彫られたものを、五十四巻本に改修した痕跡が見て取れる。<sup>(27)</sup> また洪武南蔵本と永楽南蔵本では千字文が異なるが、永楽南蔵の各帖の巻頭・巻尾に刻された千字文の多くもやはり埋木に見える。しかしながら洪武南蔵本の版木をそのまま用い、埋木等の手段で改修したかという点、ことはそう簡単ではない。

洪武・永楽両南蔵本は、版式は同一だが、永楽南蔵本が字詰を変えたために紙数の異なる帖もある。<sup>(28)</sup> また両版の字様も同じではないし、洪武南蔵本の誤刻を永楽南蔵本で訂正した箇所がしばしば見られるが、<sup>(29)</sup> それらは埋木には見えないから、両



南蔵本が同じ版本を使つて刷られたものとは考えられない。おそらく洪武南蔵本の版本が天禧講寺の火災で焼失したため永樂南蔵の印造に使えず、やむなく洪武南蔵本を底本に重校刊し、この機に乗じて溥洽の統編した卷第二十一を削除したのであろう。そうであるならば、永樂南蔵本の巻頭・巻末の巻次・千字文部分に埋木らしき痕跡が見られるのは、一旦洪武南蔵本に従つて重刊してから、卷第二十一を削除したため巻数・千字文を変更する必要が生じて、後になつて埋木したためであると考えるのが妥当であらう。

現在伝わる『統紀』のテキストには、ここに述べた南蔵本の系統に連なるものの他に、古活字本の系統に連なるものがあり、両系統とも宋版五十五巻本を底本とする。佐藤成順氏は、南蔵本系統の諸本中から大正蔵本、古活字本系統の諸本中から正統蔵本を取り上げて比較し、テキスト間に大量の異同があることを指摘し、その原因について考察した。いまその結論を要約すると、両テキスト間の異同には、大正蔵本になく正統蔵本にある場合と、その逆の場合とがあり、前者は洪武南蔵本開版の際、儒教・道教・識記関係の記事が意図的に削除されたことで生じたものであり、後者は志磐没後の記事が付け加えられたことで生じたものであるという。志磐没後の記事は、古活字本系統の諸本にも見られるが、その内容は洪武南蔵本とは全く異なるものであり、それぞれが独自に付け加えられたものと見てよい。また西脇氏は、洪武南蔵本系統のテキストには上述の記事の削除以外にも志磐の論贊を改変した箇所があることを指摘する。このような両系統のテキスト間の異同が『統紀』の原型をより一層わかりづらくしている点に注意が必要である。

#### 四、『永樂大典』本法運通塞志

話は少し遡るが、永樂帝は南京で即位すると、皇城内の文淵閣で『永樂大典』の編纂を開始し、永樂五年十一月に完成した。野沢氏の研究<sup>(30)</sup>によれば、『大典』の編纂が開始された永樂元年には、洪武南蔵の版本は南京の天禧講寺に保管され、霊

谷寺では統蔵の追刻が行われていた。また『大典』・南蔵の両方の編纂に参加した僧侶がおり、『大典』の編纂は儒仏道三教の優れた人士を一同に会して天禧講寺で行われたことがあったという。こういった当時の事情を踏まえ、野沢氏は『大典』中に採録された仏典に南蔵のテキストが採用されたのではないかと考え、『国清百録』等四種の仏典について、実際に永樂南蔵本やその他の諸本を『大典』所収本と比較し、『大典』中に南蔵本の仏典が収録されていたことを論証した。

『統紀』について野沢氏は言及しないが、『永樂大典目録』巻第四十一の「巻之一万五千九百五十七 運」～「巻之一万五千九百六十一 運」の五巻に「仏祖統紀法運通塞志」の名が見える。この『永樂大典』本法運通塞志（以下称『大典』本）は、ながらく行方不明であつたが、近年、五巻のうち巻一五九五七・巻一五九五八の二巻が発見された<sup>31</sup>。この二巻には法運通塞志自体の巻数は記されていないが、その内容は梁武帝の時代から唐の元和年間に至る。その本文を現存の諸本と比較すると、古活字本・洪武南蔵本の巻第三十八至第四十二（永樂南蔵本は一巻ずつ少ない）に相当する。法運通塞志は巻第三十五の周の昭王の時代から始まるから、『大典』本には法運通塞志十五巻のうち前三巻がなく、最大で十二巻分を収録していたことがわかる。巻一五九五七・巻一五九五八はそれぞれ法運通塞志の三巻弱を収めるから、十二巻分を収めるには五巻でちょうどよい。

最後に、『大典』本が『統紀』のどのテキストから法運通塞志を採録したか考えてみたい。佐藤・西脇両氏は洪武南蔵本が開版された際、儒教・道教・讖緯関係の記事が削除・改変されたと指摘するが、これは『大典』本の底本を考える上で重要なポイントとなるに違いない。そこで、この削除部分について、『大典』本と『統紀』の諸本とを比較したものが、『統紀』諸本・『大典』本本文対照表である。この対照表を見ればわかるように、『大典』本には洪武南蔵本で削除された記事が一樣に存在しない上、洪武南蔵本系統の諸本と古活字本系統の諸本でテキストに異同の多い箇所は、洪武南蔵本系統の諸本と一致する。さらに『大典』の編纂は天禧講寺にあつた洪武南蔵の版本が焼失する以前に完了しており、永樂南蔵の再編・重刊作業もまだ始まっていなかったはずであるから、『大典』本の底本は洪武南蔵本であつたと見てよい。

## 五、仏典解題目録の著録状況

『統紀』は建文年間に洪武南蔵の統蔵部分に初入蔵し、続けて永楽六年頃洪武南蔵本の版木が焼失したため、洪武南蔵本を底本に新たに校勘を加え、永楽南蔵に入蔵した。しかし永楽帝はかつて建文帝の寵愛をうけた溥洽が洪武南蔵本の編纂にかかわっていたことから、その統編にかかわる巻第二十一「諸師列伝六之十一」を削除した他、みずから北京で開版させた永楽北蔵には入蔵を許さなかった。しかしながら永楽南蔵が南京の經鋪で比較的容易に購入できたことから、『統紀』は次第に中国全土に広まっていた。このことは明代の目録資料、特に明代後期に發達した仏典解題目録によって確認できる。

万曆末期、嘉興の禪僧寂暁は、嘉興蔵の開版に触発されて、仏典解題目録『大明釈教彙目義門』（以下略「義門」）、その南北両蔵対照書名目録である『大明釈教彙門目録』、簡明目録である『大明釈教彙門標目』を相繼いで編纂した。<sup>32</sup> 南蔵・北蔵では唐・釈智昇『開元釈教録』以来の仏典分類法をマイナーチェンジさせた分類法が採用されていたが、当時禪籍を初めとする中国で編著された仏典が著しく増加しており、これらを著録するには、分類法のマイナーチェンジだけでは対処しきれなくなっていた。この状況に対し、寂暁の編纂した目録では仏典を天台五時教判によつて新たに分類しなおす等の新機軸を打ち出した。その一つとして、目録学史上初めて天台宗の經典を著録するための類目として聖賢著述第八之六分に此方天台教典本類を立て、ここに『統紀』を著録した。

『義門』巻第三十一此方天台教典本では「仏祖統紀（五十五巻。今作四十五巻） 宋景定四明東湖沙門志磐撰」と著録した後、一卷すべてを使つて解題を記している。その大部分は『統紀』巻首の「通例」を「叙曰」として引用したものである。これは寂暁が『統紀』を実際に手にとつて読み、さらに天台宗の經典として非常に重視していたことを意味する。『大明釈教彙門目録』巻第四には「（北蔵欠、南蔵城昆池碣字） 仏祖統紀（五十五巻。今作四十五巻）」とあることから、寂暁の見た『統紀』は、千字文が「城」・「昆」・「池」・「碣」字で、もと五十五巻あつたが当時は四十五巻（帖）に分冊されていたテキ

スト、つまり永楽南蔵本であつたことがわかる。<sup>(33)</sup>

『義門』の完成から約十五年たつた崇禎七年、天台宗の学僧智旭は三十歳の時『義門』を批判的に継承した仏典解題目録『閱蔵知津』の執筆を開始し、二十年後の順治十一年に完成させた。『統紀』はその巻第四十三雜蔵・此方撰述第二之二・十伝記に、

仏祖統紀（四十五卷）（南城昆池碣 北欠） 宋四明東湖沙門志磐撰

前有通例一卷 釈迦本紀一 西土二十四祖紀二 東土九祖紀三 興道下八祖紀四 諸祖旁出世家五 諸師列伝六 諸師雜伝七 未詳承嗣伝八 歴代伝教表九 仏祖氏繫表十 山家教典志十一 浄土立教志十二 諸宗立教志十三 三世出興志十四 三界名体志十五 法門光顯志十六 法運通塞志十七 名文光教志十八 歴代会要志十九

と著録される。寂暁がその解題に巻第三十一すべてを費やしたのに対し、その著録内容はなほだ簡略であるが、各篇に「釈迦本紀一」・「西土二十四祖紀二」のように通し番号を振るのは南蔵本の特徴の一つであり、さらに「四十五卷」・「南城昆池碣」とあるから、智旭が見たのは寂暁と同じ永楽南蔵本と見てよい。

このように、明末清初に解題目録を編纂した寂暁・智旭が見たのはいずれも永楽南蔵本であつた。このことから、当時最も流布した『統紀』のテキストは永楽南蔵本であつたことがわかる。

## 六、嘉興蔵本

嘉興蔵は万暦年間の初めに北蔵の統蔵部分の完成と入れ替わるように民間で開版された。その正蔵部分は北蔵の正蔵と統蔵からなるが、さらに南蔵に入蔵され北蔵で除外された經典五部のうち四部を追刻した。万暦二十九年に開版された嘉興蔵の目録、『大明三蔵聖教目録<sup>34</sup>』を見ると、正蔵目録四巻の後に、「大明統入蔵諸集」（北蔵の統蔵目録）があり、さらにその

後に「北蔵欠南蔵函号附」(「北蔵に収録されず南蔵に収録されている經典の千字文函号」の意)があつて五部の經典を著録し、『統紀』はその四番目に「城昆池碣 仏祖統紀(四十五卷)」と著録される。「城昆池碣」・「四十五卷」は、先述のように、永樂南蔵本の千字文と帖数である。嘉興蔵はこのリストに従い、その正蔵部分の後に『統紀』を収録したのである。

『統紀』の嘉興蔵本は、一九八七年に新文豊出版社から景印刊行された『明版嘉興大蔵經』第十冊に収録されている(以下略「新文豊本」)。その書誌は次のようである。

仏祖統紀五十四卷 宋釈志磐撰

双辺匡郭寸法不明 有界十行二十字注文小字双行 単魚尾白口 無点 有図

首楊鶴「仏祖統紀叙」(以下略「楊叙」) 次万曆四十二年釈明昱「閱仏祖統紀說」(以下略「明昱說」) 次游士任「跋

仏祖統紀」(以下略「游跋」) 次咸淳五年釈志磐「仏祖統紀序」 次校正僧五名連記 次「仏祖統紀通例」 次咸淳

中釈志磐「仏祖統紀目錄」 次「仏祖統紀卷第一／宋景定四明東湖沙門志磐撰」 以下至卷第五十四 卷頭編著事項

卷第二十六第三十四至第五十「景定」作「咸淳」 卷第五十一至第五十四「景定」作「咸淳」又「東湖」作「福泉」

一部卷末有音釈 無刊記 版心題「仏祖統紀」 版心下部に刻字数あり

景印本のため不明の点が多いが、これと同版の東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵所収本(以下略「東総本」)・内閣文庫所蔵本(以下略「内閣本」)によると、全十冊、匡郭寸法は縦二十・八横十四・三、題簽題は「仏祖統紀」で、その上部に「支那／撰述」、下部に収録巻次と墨丁が印字されており、題簽の用紙は内閣本が青、東総本が白である。内閣本は単行本として所蔵されているが、第一冊巻首に扉絵(裏云「皇帝万歳万万歳」)、第十冊の末丁に韋駄天像があり、これらは嘉興蔵と同形式のものであることから、嘉興蔵の離れ本であることがわかる。これらが新文豊本にないのは景印の際に省略されたためであろう。また東総本には游跋・韋駄天像がなく、内閣本には楊叙・游跋がない。各本の刷りの前後については、版面の状態から、新文豊本が最も早印で、内閣本・東総本の順と見られる。<sup>(36)</sup>

嘉興蔵本の出版経緯は、明人の三篇の序跋、楊叙・明昱説・游跋によつて知ることができる。まず明昱説には次のような一文がある。

欲明古聖之道、此統紀斯其至焉。子又何疑。所以楊侍御為仏祖発心、游邑侯為衆生垂手。昱道人忍以帝虎誤学人耶。

「楊侍御」は楊鶴<sup>37)</sup>のことで、侍御は監察御史（正七品）の別称である。「游邑侯」は游士任<sup>38)</sup>のことで、邑侯は知県（正七品）の別称で、当時長興県（浙江湖州府）の知県であつた。「帝虎」は形が似ているため誤刻・誤鈔された文字のことを指す。この一文は、楊鶴が『統紀』出版の発起人となり、游士任が実務に当たり<sup>39)</sup>、明昱が校正に当たつたことを述べたものと解釈できる。出版の動機は、楊叙に、

后之紹統者、若真如天台深入法華三昧、親見靈山一会儼然未散、棒喝狂禪皆当反走矣。是伊仲刻統紀意也。

とあるように、禪宗の「棒喝狂禪」に対する天台宗側の反発である。また明昱説には、

余頃憩烏瞻山、忽邑侯游公招至顧司寇之澄心樓、以校閱事見委。詢其所欲梓、則仏祖統紀也。余夙志闡釈、弗敢以不敏辭、甫焚香展卷。

とあつて、游士任が烏瞻山（長興県の西三十里）に滞在中の明昱に校閲を委嘱した経緯が記されている。「頃（さきごろ）」は、「邑侯游公」とあることから、游士任の長興県知県在任中（万曆三十八年着任）のことであり、同地で明昱に校閲を依頼しているから、開版地は長興県であつた可能性がある。その完成年ははっきりしないが、明昱説が万曆四十二年に書かれていることから、その前後に完成したものと推測される。しばしの間、この嘉興蔵本を明昱校刊本と呼んで論を進めたい。

ひとつ気になるのは、長興県は湖州府に属し、東には嘉興蔵の出版地である嘉興府があるにもかかわらず、明昱校刊本の楊叙等が全く嘉興蔵に言及しない点である。内閣本には嘉興蔵独特の題簽・扉絵・韋駄天像が見られるし、実際、東総本は嘉興蔵所収本であり、同版が『明版嘉興大蔵経』に収録されてもいる。また嘉興蔵の覆刻本である黄檗版大蔵経（以下称「檗蔵」）では当初既存の和刻本で代用されていたが、ある時期以降この版の覆刻本に交換されている。この代用本を「入れ版」

と呼び、入れ版を別版に交換することを「改刻」と呼ぶが、槧藏の改刻は嘉興藏本によって行われるのが普通である。

以上の点は、この明昱校刊本が嘉興藏本であることの証拠として十分である。ただし題簽・扉絵・韋駄天像はあくまで經典の付加物にすぎず、これらの点によって証明しうるのは、明昱校刊本が一時期嘉興藏本として印造されていたということだけである。むしろ楊叙等が全く嘉興藏に言及しないことに着目すれば、もともとは嘉興藏本として開版されたものではなかった可能性も考えられる。次に挙げる三点は、その傍証といえる。

① 嘉興藏には大抵巻末に刊記（木記）があつて、勸縁者名・願文・校正者名・筆工名・刻工名・刊刻年月・刊刻場所等が刻されているが、開版者等の序跋が収載されることはまれである。これに対し、明昱校刊本には刊記がなく、代わりに楊叙・明昱説・游跋がある。

② 嘉興藏は縦線が太く横線の細い明朝体を採用したことで有名だが、本書は明朝体ではない。

③ 嘉興藏の匡郭線は版心の天地にかからず、半丁ごとに本文の四周を双辺で囲み、版心は上部・中部・下部にそれぞれ単線の枠があり、上部には大藏經内の部類が「經」・「律」・「論」のように刻され、中部には書名・巻次・丁次、下部には千字文とその序次（一至十）が刻されている。ところが、本書には版心の下部にしか単線の枠がなく、上部に版心題、次に魚尾、巻次、丁次、刻字数が刻されていて、千字文はなく、漢籍として非常にスタンダードなものとなっている。

このように、明昱校刊本は嘉興藏一般と異なる部分が多く、題簽・扉絵がなければ、これが嘉興藏本であると判断しうる要素はほとんどない<sup>41</sup>。唯一嘉興藏本らしい点といえば、音釈の付加である。音釈とは經典中の難読の文字に対して、反切等の方法でその発音や意味を注記したもので、普通、「音釈／「經典の文字」（○○切、音○、○也）」といった形式で、各巻又は各冊の末尾にまとめて記される。音釈は、『統紀』の永樂南藏本では巻第五十二に付されるのみであるが、明昱校刊本では全五十四巻中、実に三十五巻に付されている。しかし嘉興藏では末題の後に音釈が記されることが多いのに対し、明昱校刊本では末題の前に記されている。よって、この音釈の存在も明昱校刊本がもともと嘉興藏として開版されたことを証明

するものではなく、開版・校閲に当たつて嘉興蔵の影響を受けたことを証明しうるにすぎない。

明昱説の書かれた万曆四十二年は、寂暁が『義門』を脱稿した翌年のことであり、四十六年には『義門』等三書の出版が竣工しているが、ここに著録された『統紀』は永樂南蔵本である。『義門』卷第三十九聖賢著述八之三分此方集義論釋集本には明昱の著作『成唯識論俗詮』が著録されているから、その名声はすでに嘉興まで知れ渡つていたと見てよい。それにもかかわらず寂暁が『統紀』を永樂南蔵本によつて著録したということは、いまだ明昱校刊本を見たことがなかったのである。嘉興蔵出版のお膝元にいた寂暁でさえ見たことがなかったということは、明昱校刊本がもともと嘉興の地で嘉興蔵の収録經典の一つとして開版されたものではなかったことを示す傍証とみなしうる。もしかすると、もとは嘉興蔵と関係なく単行本として開版された版木が、後に嘉興蔵の出版者の手に渡り、嘉興蔵本として印造されるようになったのかもしれない。

次に、嘉興蔵本の底本について考察してみたい。先述のように、嘉興蔵の収録經典目録である『大明三蔵聖教目録』、及びこれとほぼ同時期の寂暁『義門』はともに永樂南蔵本を著録する。これに対し、宋版は罕見の書物だったに違いなく、洪武南蔵はその後流布した永樂南蔵の影に隠れ、それがかつて存在していたことすら当時は忘れ去られていた。つまり万曆末期に『統紀』を刊行しようとした場合、永樂南蔵本がその底本の最有力候補となるのである。実際、現在嘉興蔵本として伝わる明昱校刊本は分巻・内容構成等で永樂南蔵本との間に共通点が多い。

例えば、永樂南蔵本と同じ箇所て卷第三を上下に分巻しているし、洪武南蔵開版の際、儒教・道教・讖記に関する記事として削除された箇所が永樂南蔵本と同じく削除されている。永樂南蔵本を底本とした決定的な証拠は、巻首「目録」中の「第二十卷 諸師列伝六之十」条に見える次の注記である。<sup>(4)</sup>

諸師列伝本紀原文止有十卷。目録并通例俱編為十一、而以二十一卷当之。此述者之誤矣。故後之卷々排去、目録則有十五、本紀止於五十四。今依本紀既無列伝第十一卷之文、目録中名即去之。將目録二十二卷、改為二十一。至五十五改為五十四、以合本紀之數。



これによれば、嘉興蔵本の底本では、諸師列伝の本文が十巻しかないにもかかわらず、その「目録」・「通例」は諸師列伝を全十一巻とし、その第十一を『統紀』の巻第二十一に当ててていた。しかし嘉興蔵本を校閲した明昱はこれを「述者」の誤りとして退けた。さらに底本では巻第二十二以降を一巻ずつ繰り上げた結果、目録上は五十五巻あるものの、本文は五十巻までしかないことを問題視し、本文に合わせて目録を修正した。「目録」・本文間にこのような巻数の不一致があつたのは、先述のように、永楽南蔵本だけであるから、嘉興蔵本の底本はやはり永楽南蔵本であつたと見て間違いない。

また永楽南蔵本が全四十五帖あるのに対し、嘉興蔵はわずか全十冊である。冊数がこれほど減少したのは理由がある。そもそも嘉興蔵は、閲覧の便を考えて、その装訂方法を、それまで大蔵経に採用されてきた折本から冊子に改めた。これによつて書形の寸法が横に広がり、一面（折本の一面・冊子本の半葉）の収録字数が飛躍的に増えた。具体的には、永楽南蔵が一面六行十七字であつたのに対し、嘉興蔵では十行二十字となり、一面当たりの収録字数が百二字から二百字の約二倍に増えた。単純計算すれば、南蔵一帖を嘉興蔵ではおよそ半分の厚みに収めることが可能となつたのである。嘉興蔵本『統紀』の冊数は実際には南蔵本の四分の一以下に減っているが、これは印刷に使われた料紙が、官版である永楽南蔵に比べ、安価で薄手の竹紙に変更されたためである。こうして嘉興蔵では一冊あたり折本三・四帖分を収録することになつたのである。

しかしながら嘉興蔵本は、巻数・分冊等の体裁面の変更を除けば、忠実に永楽南蔵本を重刻したというわけでは決してない。最も大きな変化は音釈・注記の追加である。音釈についてはすでに述べたので、注記について述べると、先に挙げた巻次に関する注記が巻首の「目録」にある他、巻第十八巻末には「此巻六十二人、本紀止録六人、遺失五十六人。」とある等、『統紀』の内容構成に対する理解を助けるための注記が随所に加えられている。これら音釈・注記は永楽南蔵本にはなかつたものであり、明昱等が永楽南蔵本を重校刊する際にはじめて加えたものである。

## おわりに

以上、明代における『仏祖統紀』の出版について、いくつかの新資料を交えながら考察を加えてきた。その結果をまとめると、次のようになる。

『統紀』は建文三年冬に建文帝の命を受けて南京で開版が始まった洪武南蔵の統蔵部分に初入蔵された。その底本には巻第二十一を欠く宋版五十五巻本が用いられ、さらに当時僧録司左善世であつた溥洽が巻第二十一「諸師列伝六之十一」を統編した他、本文の増刪が行われた。靖難の変で永樂帝が即位してまもなく、洪武南蔵本中の法運通塞志が『永樂大典』に採録されたが、永樂六年頃、洪武南蔵の版木保管所であつた天禧講寺が放火され、『統紀』の版木が焼失した。そこで永樂帝は洪武南蔵本に校勘を加えて重刊させたが、かつて建文帝の寵愛をうけた溥洽を嫌い、その統編にかかわる巻第二十一「諸師列伝六之十一」を削除し、それに伴つて巻第二十一以降の巻次を埋木によつて一卷ずつ繰り上げた。これが永樂南蔵本であり、嘉興蔵本開版以前において、最も流布した『統紀』のテキストとなつた。その一方で、永樂南蔵開版後まもなく永樂帝の肝いりで北京で開版された永樂北蔵では、ついに『統紀』の入蔵自体が取り消された。

永樂南蔵本は本文を五十五巻から五十四巻に変更したものの、巻首の目録は五十五巻本のままであつたため、本文と目録の巻数が一致していなかった。その後、万曆四十二年頃、楊鶴が発起人となり、游士任が実務、明昱が校閲に当たつて、永樂南蔵本を重校刊した際、この不一致に気づき、本文に合わせて目録を五十四巻に変更し、さらに閲読の助けとして注記・音釈を付加した。また装訂を従来の折本から冊子体に変更し、版式・料紙も改めて、安価で使い勝手のよいものにした。これが現在嘉興蔵本として伝わるものである。しかしながら字体や版式等で嘉興蔵一般と異なる点が多いことから、もとは嘉興蔵と関係なく開版された版木が、嘉興蔵出版者の手に渡り、嘉興蔵本として印造されるようになった可能性も考えられる。日本の黄檗版大蔵經で行われた入れ版は、もしかすると嘉興蔵のこういった収録經典に着想を得たのかもしれない。

本稿の執筆にあたっては、閲覧・文献複写等で駒沢大学図書館・立正大学熊谷図書館・東京大学総合図書館・国立公文書館・成田山仏教図書館・明治大学中央図書館等の関係諸機関にお世話になった。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

注

- (1) 宋版については、拙稿『仏祖統紀』宋版の出版をめぐつて——東洋文庫蔵『四庫全書存目叢書』景印本に寄せて——（『東洋文庫書報』第四十号、二〇〇九年三月）で詳しく論じる。
- (2) 以下、和刻本については、拙稿『江戸時代における『仏祖統紀』の出版』（『日本漢文学研究』第四号、二〇〇九年三月）で詳しく論じる。
- (3) 佐藤成順『仏祖統紀』の『大日本統蔵経』本と『大正新修大蔵経』本の文献上の問題点（『宋代仏教の研究』（山喜房仏書林、二〇〇一年四月）所収。初載『三康文化研究所年報』31（二〇〇〇年三月）、及び西脇常記『仏祖統紀』テキストの変遷（『人文学』第百八十一号、同志社大学人文学会、二〇〇七年）を参照。
- (4) 西脇氏もその存在を指摘するが、テキストクリティクの必要性に言及するのみである。
- (5) 『洪武南蔵』第二四二冊「再版『洪武南蔵』後記」を参照。
- (6) 野沢佳美『明代大蔵経史の研究』（汲古書院、一九九八年十月）「第一部 明初南蔵成立過程の基礎的考察」第一章 明初の洪武南蔵について・「第五章 洪武南蔵から永楽南蔵へ」及び「明初における二つの南蔵——洪武南蔵から永楽南蔵へ——再論——」（『立正大学人文科学研究年報』第45号、二〇〇八年三月）を参照。
- (7) 佐藤氏前掲論文の初載は二〇〇〇年、単行本再録は二〇〇一年であるが、『統紀』を含む『洪武南蔵』第二三七至二三九冊はいまだ刊行されていなかったらしく、佐藤氏は「まだ日本で披見することができない」とし、野沢氏の研究に従ってその総巻数・欠巻数を記す。一方、西脇氏は洪武南蔵に関する先行研究を要約したのみで、洪武南蔵本『統紀』について詳しい考察をしていない。
- (8) 「再版『洪武南蔵』後記」（前出）によれば、景印の際、原本の残欠・虫損を清代の官版大蔵経である竜蔵（『乾隆版大蔵経』とも呼ぶ）で補ったり、画像処理による補修を施したりしているという。洪武南蔵に限らず、このような処理が景印本出版の際になされることは意外と多い。これは、原本の姿を正確に景印することよりも、本文がはつきりと判読できることがしばしば優先されるからである。なお竜蔵は『統紀』を入蔵していないから、竜蔵による補修はありえない。
- (9) 匡郭は景印本では消されているため、李富華・何梅『漢文仏教大蔵経研究』（宗教文化出版社、二〇〇三年十二月）巻頭の書影等により推測した。
- (10) 洪武南蔵に限らず、大蔵経は五千巻を優に超える膨大な叢書である。そのため経蔵内から目当ての經典を探し出すのは容易ではない。そこで大体十帖ごとに千字文一字を割り当て、これを題簽・巻首・版心等に彫り込み、時には千字文を記した収録經典目録を編むことで、千字文を頼りに迅速に目当ての經典を探し出せるよう工夫が施されている。ちなみに千字文の割り当ては大蔵経によって異なるため、大蔵経の零葉・零本がどの大蔵経のものをかを判断する際有力な手がかりとなる。
- (11) なお補われたのは立伝者リストだけで、列伝の本文を欠く。これらを何によって補ったのかは後考に俟ちたい。
- (12) 明・葛寅亮『金陵梵刹志』卷第三十一「聚宝山報恩寺」所収。
- (13) 洪江全善・森立之『経籍訪古志』卷第五子部下釈家類著録の「仏祖統記五十四卷 宋槧本」が卷第二十一を欠くため五十四巻としたのだとしたら、これが宋版五十五巻ということになるが、現在所在を確認できない。
- (14) 野沢氏前掲書第一部第一章を参照。
- (15) 『金陵梵刹志』卷第三十一「聚宝山報恩寺」を参照。なお天禧講寺は永樂十年に再建、大報恩寺と改額され、同十九年に諸官府が北京に遷されるまで僧録司が置かれた。

- (16) 野沢氏前掲書第一部第五章を参照。
- (17) 現存目録として、『立正大学図書館蔵明代南蔵目録』（立正大学図書館、一九八九年二月）、山口県教育委員会文化課編『快友寺一切経調査報告書』（山口県教育委員会、一九九二年）が公刊されている。
- (18) 欠巻は巻第一至第三下第七第八第十三至第十六第二十三第二十七至第三十二第三十四至第三十八第四十第四十一第四十三第四十五第四十七第五十三である。
- (19) 『立正大学図書館蔵明代南蔵目録』（前掲）の巻首に納経記の書影が採録されている。
- (20) 経鋪とは、仏典の開版・印造を専門に行う民間出版業者のことであり、南蔵の版木保管所である南京城南端の聚宝門外にあった報恩寺（旧天禧寺）の周辺には、南蔵の印造を請け負った経鋪が集中していた。野沢氏前掲書「第三部 南蔵の展開と伝播」第十一章「南蔵と南京経鋪について」を参照。
- (21) 続修本はその底本を「明刊本」と記すのみであるが、立正本の存巻と同版であるから、永樂南蔵本と見て間違いない。
- (22) 総帖数は、『北京大学図書館蔵善本書目』（北京大学図書館、一九五八年九月）による。なお現在二種伝わる永樂南蔵の収録經典目録のうち、永樂南蔵塞字函所収の『大明重刊三蔵聖教目録』（『中華大蔵経（漢文部分）第一〇六冊所収』）は、巻下・此方撰述の最末尾に「城（十二巻）昆池（每号十一巻）仏祖統紀四十五巻」と著録し、『金陵梵刹志』巻第四十九所収の「南蔵目録」此方撰述は「城（十二巻二百四十一張尾半二張）昆（十一巻二百三十張尾半三張）池（十一巻一百九十七張尾半二張）碣（十一巻二百一十五張尾半四張）仏祖統紀」と著録する。「十二巻」・「十一巻」とあるのは、巻数ではなく、千字文・「城」・「昆」・「池」・「碣」各字の帖数であるから、『大明重刊三蔵聖教目録』の「四十五巻」が総帖数であることがわかる。
- (23) 一紙の横幅。
- (24) 野沢氏前掲書第一部第五章を参照。
- (25) 二〇〇〇年三月に綵装書局から景印刊行された『永樂北蔵』の第一九九・二〇〇冊には『統紀』五十四巻が収録されているが、これは北蔵本ではなく、『大明三蔵聖教目録』『北蔵欠南蔵函号附』によつて永樂南蔵本を景印したものである。なお西脇氏はこの上奏文の『統紀』を、宋版四十巻本の流れを汲み、民間の募縁で刊行された単行本とみなすが、先述のように「四十五巻」は洪武南蔵本・永樂南蔵本の帖数を指し、さらに「今査得せし聯珠頌古等は、皆南蔵内への増入に係わる」とあることから、上奏文中の『統紀』が単行本ではなく、南蔵本であることは明らかである。
- (26) 同様の例は、釈浄戒・釈居頂が編纂した洪武南蔵の禪籍についても見受けられる。詳しくは、野沢氏前掲書第一部「第三章 南蔵初入蔵禪籍と定嚴浄戒」等を参照。
- (27) 現物調査した立正本では、巻第二十五第四十九の巻頭巻次と巻第二十四第二十五第四十八第四十九第五十四の末題巻次が埋木に見える。巻第五十一第五十二両巻を収める「碣九」帖は、巻頭巻次を「巻第五十一之第五十三」に、巻第五十二の末題巻次を「巻第五十三」に作り、誤つて五十五巻本の巻次を刻している。その他、巻第四十二の「二」は巻頭・末題とも「三」の第二筆を削つたような「二」である。欠巻のない続修本ではこの手の埋木の痕跡・誤刻等はさらに多い。一例を挙げると、巻第四十三の末題巻次は「巻第四十」に作るが、これは「三」字を埋木し忘れたか、埋木が欠落したものであろう。誤刻は巻頭巻次よりも末題巻次に多いが、これは巻数を埋木によつて改修する際に巻末にあつたため見落とされたものと思われる。埋木の状態がよければ埋木の有無は判断しにくいし、巻第五十一第一紙のように、破損等のため版木ごと改刻されたものもあるから、巻第二十一以降の他の巻にも埋木が施されていた可能性がある。
- (28) 洪武南蔵巻第二十四至第二十六を収める黠六が永樂南蔵本（昆六）では一紙少ない。本稿末「明代諸本内容構成対照表」を参照。
- (29) 洪武南蔵本では各巻巻頭の編著者名を「志盤」・「志磐」・「志磐」に誤る巻があるが、永樂南蔵本ではすべて「志磐」に改めており、また洪武南蔵本巻第四十三では法運通塞志第十七之九を「十之九」に誤るが、永樂南蔵本では「十七之九」に訂正する。
- (30) 以下、永樂南蔵と『永樂大典』編纂の關係については、野沢氏前掲書第一部「第二章 南蔵と永樂大典」に詳しい。
- (31) 『海外新発見永樂大典十七巻』（上海辞書出版社、二〇〇三年八月）を参照。
- (32) 拙稿『大明釈教彙目義門』の成書と万暦版の出版（『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第三十七集、二〇〇七年三月）を参照。
- (33) なお『大明釈教彙門標目』巻第四は「仏祖統紀 釈迦牟尼仏本紀、西土二十四祖紀、天台九祖紀、諸宗立教志、三界名体志、法運通塞志、名文光教志等。宋景定四明沙門志磐撰」と著録する。

- (34) 『大明三藏聖教目録』は、巻首の目次題に「北藏目録総」とあるため、一般に北藏の目録と見なされているが、実は嘉興藏の目録である。刊本大藏経は数有るが、近代以前のものに限って言えば、その刊行者達によって正式名称が定められていることはほとんどない。北藏といったり南藏といったりするのはあくまで他の大藏経と区別するために便宜的に付けられた俗称である。つまり北藏自身がその目録の中でみずから「北藏目録総」と記すとは考えにくいのである。また、わざわざ永樂帝の勅命で削除した經典（「北藏欠南藏函号附」）をその収録經典目録に著録するとも考え難い。なお『大明三藏聖教目録』には嘉興藏本と和刻本二種とがあり、日本では黄檗版大藏経の目録として使われた。和刻本については、拙稿『「大明三藏聖教目録」の異版と後印』（『成田山仏教図書館報』復刊第76号、二〇〇七年四月）を参照。
- (35) 東総本に游跋がないのは、巻第五十四の第十八丁以下を欠くためかもしれない。なお二〇〇八年五月、元興寺文化財研究所から長谷寺所藏の嘉興藏の目録、『豊山長谷寺拾遺第四輯之二明版一切経』（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、二〇〇八年五月）が刊行された。これによれば、この嘉興藏は寛文七年に寄贈されたものであり、康熙三年の刊記があることから、印造からわずか三年で日本に将来されたことがわかる。その『統紀』には、巻首に内閣本と同型の扉絵が付され、楊叙・明昱説が続き、游跋・章駄天像がない。
- (36) 版口下部は新文豊本が白口、東総本・内閣本が小黒口である。新文豊本は景印の際に意図的に小黒口を消したのかもしれない。
- (37) 楊鶴、字修齡、武陵（湖広常德府の属県）の人、号弱水、万曆三十二年進士、官は兵部尚書に至る。『明史』巻第二百六十に伝がある。
- (38) 游士任、字肩生、嘉魚（湖広武昌府の属県）の人、号伊仲、万曆三十八年進士、のち監察御史に任ぜられた。清・邢澍修、清・錢大昕等纂『長興県志』（嘉慶十年刊本）巻第十九名宦に伝あり。
- (39) 游跋に「楊直指曰、如々は々、盍梓之以俟明眼人、作円満觀。」とあり、楊鶴から直々に出版を指示されている。
- (40) 明昱、蓬溪（四川潼川州の属県）の人、号高原。万曆三十九年より江寧南屏山（西湖の南岸、天台宗の大本山）に掛搭し、のち国師となる。唯識関係の著書多数。清・吳章祚等修、清・顧士英等纂『蓬溪県志』（道光二十五年序刊本）巻第十三仙釈志・「錦江禪灯」（已統藏八十五卷）第二十に伝あり。
- (41) 『統紀』の他、例えば『明版嘉興大藏経』第三十一・三十二冊所収の『閻藏知津』も嘉興藏一般と版式が異なる。
- (42) 佐藤氏も、この注記や本文に見られる永樂南藏本との共通点から、嘉興藏本が永樂南藏本系統のテキストであると考えている。西脇氏は、北藏が『統紀』を収録していないから、「南藏本」が底本であるとする。
- (43) 巻首「通例」の「釈列伝」に「……作諸師列伝十一巻。」とある。
- (44) この問題については、拙稿「新勝寺藏黄檗版大藏経の異版について」（『成田山仏教図書館報』終刊号、二〇〇八年十月）で詳しく論じた。

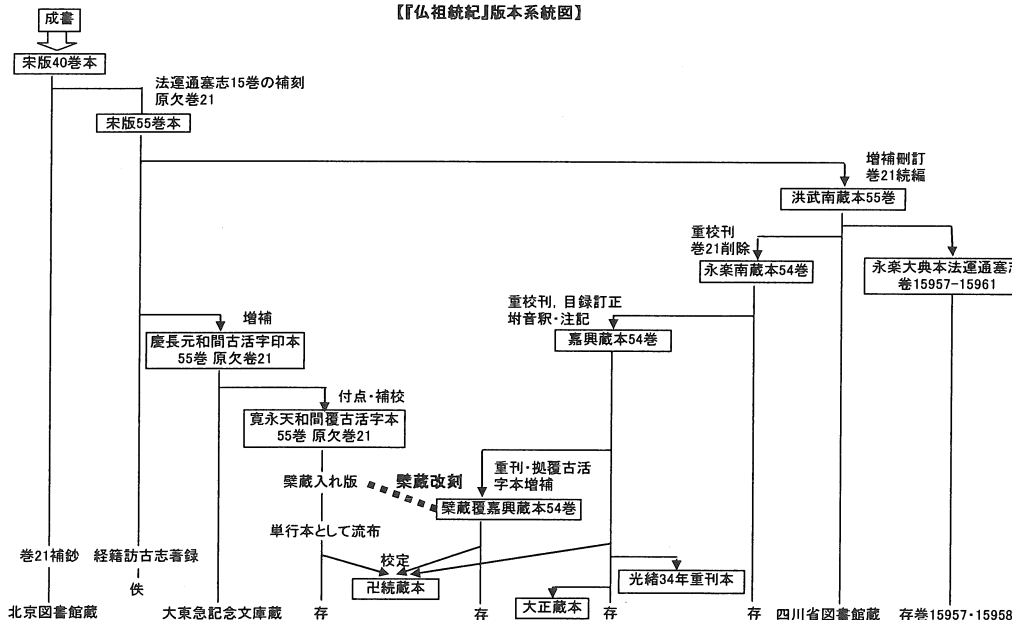
【明代諸本内容構成・分冊対照表】

宋版40巻本	宋版55巻本	古活字本	洪武南蔵本			永楽南蔵本			嘉興蔵版		
内容構成	内容構成	内容構成	内容構成	千字文	丁数	内容構成	千字文	丁数	内容構成	丁数	冊
—	—	—	—	—	—	扉絵, 蓮牌	—	○	扉絵, 偈	1ab	
序, 例, 目	—	序, 例, 目	序, 例, 目	賞1	15	序, 例, 目	城1	15	説, 序-例, 目	3, 12, 9	
巻1	巻1	巻1	巻1	賞2	16	巻1	城2	16	巻1	20b	1
巻2	巻2	巻2	巻2	賞3	17	巻2	城3	17	巻2	22a	
巻3	巻3(欠)	巻3	巻3上	賞4	25	巻3上	城4	25	巻3上	32a	
巻4	巻4(欠)	巻4	巻3下	賞5	23	巻3下	城5	23	巻3下	29b	
巻5	巻5(欠)	巻5	巻4	賞6	15	巻4	城6	15	巻4	19b	2
巻6	巻6(欠)	巻6	巻5	賞7	24	巻5	城7	24	巻5	31a	
巻7	巻7(欠)	巻7	巻6	賞8	25	巻6	城8	25	巻6	32b	
巻8	巻8(欠)	巻8	巻7	賞9	22	巻7	城9	22	巻7	11b	
巻9	巻9	巻9	巻8			巻8			巻8	18a	
巻10	巻10	巻10	巻9	賞10	18	巻9	城10	18	巻9	24a	
巻11	巻11	巻11	巻10	賞11	24	巻10	■1	24	巻10	32a	
巻12	巻12	巻12	巻11	賞12	19	巻11	■2	19	巻11	15a	3
巻13	巻13	巻13	巻12			巻12			巻12	11a	
巻14	巻14	巻14	巻13	黜1	22	巻13	■1	22	巻13	12b	
巻15	巻15	巻15	巻14			巻14			巻14	17a	
巻16	巻16	巻16	巻15	黜2	15	巻15	昆2	15	巻15	20b	
巻17	巻17	巻17	巻16	黜3	13	巻16	昆3	13	巻16	17a	
巻18	巻18	巻18	巻17			巻17			巻17	11b	
巻19(目)	巻19	巻19	巻18	黜4	20	巻18	昆4	16	巻18	9b	
巻20(目)	巻20	巻20(目)	巻19(目)			巻19(目)			巻19	2a	
巻21(補鈔)	巻21(原欠?)	巻21(原欠)	巻20(目)			巻20(目)			巻20(目)	1ab	4
巻22	巻22	巻22	巻21(目)								
巻23	巻23	巻23	巻22	黜5	18	巻21	昆5	18	巻21	11a	
巻24	巻24	巻24	巻23			巻22			巻22	12a	
巻25	巻25	巻25	巻24	黜6	32	巻23	昆6	31	巻23	11b	
巻26	巻26	巻26	巻25			巻24			巻24	22b	
巻27	巻27	巻27	巻26			巻25			巻25	12b	
巻28	巻28	巻28	巻27	南(黜)7	31	巻26	昆7	31	巻26	39b	5
巻29	巻29	巻29	巻28	黜8	29	巻27	昆8	29	巻27	38b	
巻30	巻30	巻30	巻29	黜9	23	巻28	昆9	23	巻28	30b	
巻31	巻31	巻31	巻30	黜10	20	巻29	昆10	20	巻29	25b	6
巻32	巻32	巻32	巻31	黜11	15	巻30	昆11	15	巻30	19a	
巻33	巻33	巻33	巻32	欠		巻31	池1	22	巻31	34b	
巻34	巻34	巻34	巻33	欠		巻32	池2	14	巻32	21b	
	巻35	巻35	巻34	陟3	17	巻33	池3	17	巻33	22b	
	巻36	巻36	巻35	陟4	11	巻34	池4	11	巻34	15a	7
	巻37	巻37	巻36	陟5	10	巻35	池5	10	巻35	13b	
	巻38(欠)	巻38	巻37	陟6	27	巻36	池6	27	巻36	36a	
	巻39(欠)	巻39	巻38	陟7	15	巻37	池7	15	巻37	20a	
	巻40(欠)	巻40	巻39	陟8	16	巻38	池8	16	巻38	20b	
	巻41(欠)	巻41	巻40	陟9	32	巻39	池9	32	巻39	41b	8
	巻42(欠)	巻42	巻41	陟10	16	巻40	池10	16	巻40	21a	
	巻43(欠)	巻43	巻42	陟11	18	巻41	池11	18	巻41	23b	
	巻44	巻44	巻43	孟1	25	巻42	碣1	25	巻42	33a	
	巻45	巻45	巻44	孟2	22	巻43	碣2	22	巻43	28a	
	巻46	巻46	巻45	孟3	14	巻44	碣3	14	巻44	18b	
	巻47	巻47	巻46	孟4	23	巻45	碣4	23	巻45	29b	9
	巻48	巻48	巻47	孟5	15	巻46	碣5	15	巻46	20b	
	巻49	巻49	巻48	孟6	24	巻47	碣6	24	巻47	26b	
巻35	巻50	巻50	巻49			巻48			巻48	5b	
巻36	巻51	巻51	巻50	孟7	18	巻49	碣7	18	巻49	23b	
巻37	巻52	巻52	巻51	孟8	16	巻50	碣8	16	巻50	21b	
巻38	巻53	巻53	巻52	孟9	21	巻51			巻51	18b	10
巻39	巻54	巻54	巻53	孟10	25	巻52	碣9	21	巻52	9b	
巻40	(巻55?)	巻55	巻54	孟11	16	巻53	碣10	25	巻53	33b	
刊板後記	—	刊板後記	—	—	—	巻54	碣11	16	巻54	21b	
						韋駄天像	—	—	韋駄天像	1a	

\* 永楽南蔵本の丁数は『統修四庫全書』所収の明刊本による。

\* 嘉興蔵本の丁数は国立公文書館内閣文庫所蔵本による。東京大学総合図書館所蔵本は、巻首に楊鶴序が2丁分あり、巻27の36丁以下を欠き、巻54の17丁以下を欠く他は、内閣文庫所蔵本と一致する。

【『仏祖統紀』版本系統図】



【『大典』本・『統紀』諸本文対照表】

異同箇所		古活字本系統の諸本			洪武南蔵本系統の諸本			『大典』本		
No.	見出し	有無	巻	丁・行	有無	巻	丁・行	有無	巻	丁・行
53	三年帝…通玄妙(四年詔…孔子廟)○帝嘗…(光顯志)	○	38	2a6	×	38	2a2	×	15957	1b3(1)
54	太平真…元大赦(述日子…不幸也)太平真…(有子遺)	○	39	3a4-3b11	△	39	2e3-3a6	△	15957	9b6(2)-10a1(2)
55	五台北…(分律始)(太和三…文宣公)○敎思…門都統	○	39	6a9	×	39	5b2	×	15957	11a3(1)
56	四年(封…紹聖侯)五年詔…而不行	○	40	9a6	×	40	8a1	×	15957	20b6(1)
57	二年詔…為国式(○詔国…孔子廟)四年詔…敷而退	○	40	10a8	△	40	8e5	△	15958	1a5(1)
58	正觀元…興聖寺(○勅毫…二十家)○詔沙門…等監護	○	40	13b7-8	×	40	11e3	×	15958	2b6(2)
59	○五月…審平哉(詔州果…孔子廟)五年正…(觀政要)	○	40	16a5	×	40	13e6	×	15958	3b8(2)
60	○十一…為案制(○勅潤…聖聖侯)○詔曰…者魏服	○	40	18a5-b2	×	40	15d3	×	15958	4b7(2)
61	○有西…之苦也(十四年…君有焉)詔曰遺…(館詞林)	○	40	20a11-b9	×	40	17b5	×	15958	5b6(2)
62	○詔法…華三昧(二十一…聖廟廷)二十二…最帝說	○	40	23b11-24a7	×	40	19e5	×	15958	7a6(1)
63	永淳元…(不空教)(○嵩山…以処之)二年西…者便之	○	40	34a11-b4	×	40	28d5	×	15958	12a2(1)
64	開元元…勸仏殿(○初葉…解而去)二年正…寺贖取	○	41	7a7-b7	×	41	6b6	×	15958	17a1(2)
65	○日本…国求法(六年李…知所終)七年西…彰感陰	○	41	8b9-9b1	×	41	7b4	×	15958	17b1(2)
66	○姚崇…之終也(十三年…一子官)十四年…行於此	○	41	10b11-11a1	×	41	8c5	×	15958	18a4(1)
67	○武功…者基衆(十九年…備十哲)○沙門…曰陵雲	○	41	13a5-6	×	41	10b5	×	15958	19a4(1)
68	二十一…以誦習(○上遺…陳誠者))二十三…之西山	○	41	14a2-10	×	41	11a2	×	15958	19b2(1)
69	二十三…之西山(○司馬…然以授)二十四…于天下	○	41	14a11-b6	×	41	11a3	×	15958	19b2(2)
70	二十七…開元寺(○八月…公侯伯)二十八…真之塔	○	41	15b1-5	×	41	11d4	×	15958	19b7(2)
71	二十八年(四月帝…開元觀)○吉州…真之塔	○	41	15b6-9	×	41	11d5	×	15958	19b8(1)
72	二十九年(正月詔…策八第)○河南…罰奏可	○	41	15b11-16a3	×	41	11e1	×	15958	19b8(2)
73	天寶元年(正月老…生百人)○西域…(者因此)	○	41	16a9-b5	×	41	12a1	×	15958	20a2(1)
74	○西域…(者因此)(○秘書…湖一曲)二年○…月戒壇	○	41	18a2-5	×	41	12b4	×	15958	20a5(1)
74	二年(上老君…元皇帝)○勅羅浮…月戒壇	○	41	18a6	×	41	12b5	×	15958	20a5(2)
75	三載(上見金…年為載)○千福…七十粒	○	41	18b2	×	41	12c6	×	15958	20a7(1)
76	六載勅…度三人(七載上…元皇帝)十四載…加訓導	○	41	19a11	×	41	13b5	×	15958	20b5(2)
77	七載勅…度三人(十三載…皇大帝)十四載…加訓導	○	41	19b1-2	×	41	13b5	×	15958	20b5(2)
78	杜鴻漸…内敎授(二載正…復京師)○上皇…九十九	○	41	20a8-9	×	41	13e5	×	15958	21a2(2)
79	上元元年(追尊齊…文宣王)○敎中…内供養	○	41	21b1	×	41	14e4	×	15958	21b3(2)
80	六年(天下大…二錢者)○般若…御製序	○	42	12b3	×	42	10e6	×	15958	27b6(2)

凡例

「No.」、佐藤成順氏の付した異同箇所の整理番号。  
「見出し」、古活字本系統の諸本と洪武南蔵系統の諸本との間に異同のある箇所を「(前三字…後三字)」のように記し、その前後の記事を「(前三字…後三字)」の前後にそれぞれ「前三字…後三字」のように記した。  
○ 「(前三字…後三字)」と全同、もしくは少異のみ  
△ 「(前三字…後三字)」と異同多し  
× 「(前三字…後三字)」がない  
〈 〉 原文の小子注